

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191300066		
法人名	社会福祉法人サンシャイン福祉振興会		
事業所名	グループホームかわばた荘		
所在地	岐阜県加茂郡白川町坂ノ東5467-1		
自己評価作成日	令和4年7月25日	評価結果市町村受理日	令和4年10月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kairokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhvu_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2191300066-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和4年8月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「ゆっくり・やさしく・おだやかに」を理念に持ち、穏やかに生活していただけるように支援している。本人のできる事を把握し、維持できるように職員間で情報の共有をし意見を出し合う事、家族との連携を大切にしている。コロナの影響で地域に方との交流や買い物等の外出ができなくなっているので、作品作りを多くしたり、季節の花を飾る事、季節の野菜を見て頂く事を大切にしている。日頃の会話から利用者の気持ちや思いを引き出されるような関わりを持つことも心がけている。誕生日には特別な日と感じて頂けるように、希望メニューを楽しんで頂いたり、日常から食べたい物を伺い献立に取り入れている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

現在、82歳から99歳の利用者が共に暮らしており、利用者一人ひとりの穏やかな暮らしを支える職員が感じられる事業所である。コロナ禍で地域交流や買い物、外出、家族との面会など自粛や制限はあるが、畑で野菜を収穫したり、地域の人からの鮎の差し入れもある。秋には芋ほりを楽しみ、朴葉寿司、朴葉餅、梅干し漬け、五平餅作りなど、利用者が主体となって作業に取り組むなど、暮らしの中の楽しみとなっている。作業やイベント時の利用者の生き生きした表情を毎月の通信に掲載し、家族や近隣に届けている。職員は、利用者尊重を常に意識し、家族や地域と繋がりがながら、支援に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらい 3. 職員の1/3くらい 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらい 3. 家族等の1/3くらい 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を揚げ、常に意識をして介助している。コロナ禍であり、地域の方に来所して頂く事が難しくなっているが、開かれた施設を目指している。	複数の施設を運営している法人であるが、ホーム独自に「ゆっくり・やさしく・おだやかに」の理念を掲げ、職員間で共有している。法人内の異動も少ない。勤務年数の長い職員が多く、理念を日々意識しながらケアを実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎月かわばた通信を発行し近隣の地域の方に配布している。食事会を行っていたが、コロナ禍の為招いていないので交流の機会がもてない。地域の方から野菜を頂く事もある。	毎月発行している「かわばた通信」は、利用者の暮らしがよくなるよう、工夫をしながら多くの写真を掲載し、近隣にも配布している。コロナ禍で地域との交流が困難な状況下にあるため、通信は、利用者と地域とのつながりを保つ役割を果たしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	町の作品展に出品をした。見学に行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回会議を開催している。法人内の2事業所と合同で開催で広い地域の方に実践や状況の報告を行い、意見交換や意見をもらっている。感染症の影響で会議の自粛あり、書面だけの提出月もあった。	同法人施設や事業所と合同で2回、単独で4回開催し、コロナ感染症の拡大状況に応じて書面での開催もある。関係者には、会議内容をQ&A形式で分かりやすく記述した会議実施報告書を送付している。単独会議では事業所課題をじっくり話し合い、合同会議は運営の連携につなげている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月かわばた通信を配布している。運営推進会議に参加してもらい意見を頂いたりしている。必要に応じて随時連絡をしている。	町の担当者が運営推進会議に出席し事業所の実情を把握した上で、コロナ対策を含む助言・指導を受けている。意見交換も行い、災害時の協力関係が構築されている。行政からの文書は法人本部に送付されているが、必要な文書入手し、町と連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内に『身体拘束廃止委員会』があり、研修会に参加し身体拘束についての理解、予防に努めている。夜間は防犯上玄関の施錠をしているが、昼間は開放している。しかし事故につながる危険性もあるので、意識をして見守りを行っている。事務所に言葉の制御(スピーチロック)のポスターを掲示している。	毎月、法人内で身体拘束廃止委員会が開催されている。その場には事業所から委員を出していないが、会議内容を職員に周知し、事業所内の改善委員会で、具体的事例を通して拘束をしないケアに取り組んでいる。「ストップ・スピーチロック」の絵入りポスターを事務所に掲示し、職員の意識づけを図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ジョブトレーニングアカデミーの高齢者虐待防止の研修を受けている。言葉の暴力がないように心がけている。内出血があった場合は報告書に記入し、内出血がしやすい方は家族に報告している。利用者の対応に息づまるような時は職員が交代するようにしている。		

岐阜県 グループホームかわばた荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	町の成年後見制度の研修会に参加した。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時や利用料金改定等があった時には、家族に説明をし理解を得ている。経済的不安のある家族には、話をする機会を設けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日々の利用者との関わりで聞かれる発言を大切にしている。家族の意見や要望は面会時や電話の時に聞いたりしている。その都度職員に伝達し情報の共有、職員間で話し合い実践に繋げている。苦情や相談窓口の第三者委員会がある。	職員は、日々の関わりの中で利用者の意向を把握するよう努めている。コロナ禍にある事から、家族との面会を制限しているが、衣替えや通院同行等の来訪時、電話でも要望を聞き、ケアや運営に反映させている。毎月発行の通信には、利用者全員の様子がわかる写真を掲載し、担当者からの個別便りと共に送付している。	毎月の通信や個別便りは、利用者の様子がよくわかり、家族に好評である。未だ、面会制限をせざるを得ない状況であるため、今後は行事予定や職員紹介、運営状況等も加えるなど、家族とのコミュニケーションが更に深められるよう、通信の効果的な活用にも期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議で職員の意見や提案を出し合っている。出席できない職員にはレポートで意見を聞いている。それ以外の時にも意見や提案が言いやすい雰囲気作り心がけている。	管理者は就業環境の整備及び職員個々の希望に配慮しており、職員の定着率も高い。常に職員間で意見交換しながら、提案や改善点を上に挙げている。また、職員研修は個々に学べるリモート研修を取り入れており、その成果が職員の意見や提案等にも表れ、それらを運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年度末には施設長等と就業に関する面談が設けられている。それ以外の時でも相談を受けてもらえる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修とジョブメドレーアカデミーの研修を受けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	機会が設けられていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接や利用前に本人や家族に見学して頂く事もあった。その時に本人の希望や話を伺えた時には不安や思いを少しでも理解できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用前に見学に来て頂いたり、介護上の思いを聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所当初は暫定的であるが、得た情報を元に、少しでも早く施設生活に馴染めるように本人の思いを聞くことを心掛けている。ケアマネとも連携をとり情報を得ている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	可能な方は一緒に食事作りをしている。畑の野菜の収穫や朴葉寿司、梅やらっきょう漬け等の調理で長年の経験から教えてもらいながら一緒に作業をしている。洗濯物を干す、たたむ、掃除等の日常的な家事も一緒に行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月家族に写真付きの手紙、かわばた通信を出して状況報告をしている。何かあった時には電話で報告をしている。本人と電話で話をしていただく事もある。感染症がない時には家族の宿泊も可能である。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外部の俳句の会に入っている方や知人や友人に手紙を出される方の支援を行っている。	現在は、馴染みの場所へ行ったり、地域との交流機会も制限されているが、通信の配布は継続し、関係者とのつながりを維持している。入居前から俳句を趣味にしている利用者の作品を、法人発行情報誌への掲載や、句会や町の広報誌への投稿を支援している。また、家族や友人へ手紙を出せるよう支援し、孫からの返事を楽しみにしている人もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係(仲の良し悪し)を把握し席等の配慮をしている。同郷の方の仲介を行っている。必要に応じて席替えや居室変更を行った事もある。外出や行事の時には気の合う方と過ごせるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	法人内の特養に入所となった方の様子を聞いたり見たりしている。外部で家族とお会いした時には話をする事もある。退所した家族から野菜を頂く事もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活の中での発言や本人の思いや意向に耳を傾けている。表情等からも思いを受け入れられるように観察している。	職員は、常に事業所の理念である「ゆっくり、やさしく、おだやかに」の姿勢で利用者と向き合い、本人の思いや意向の把握に努めている。担当制を導入しているが、全職員が利用者一人ひとりの思いや意向を理解できるよう、変化や新たな情報等を伝達しながら共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から情報を聞いている。事前情報書等がいつでも見れるようにケースファイルに綴じてある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケース・看護記録・日誌に記入し、体調の把握や毎日の状況、発言等の把握に努めている。勤務に入る前には申し送りを行っている。職員会議でも話し合いをしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	生活や心身の状況を把握し、本人や家族の意向に沿えるように介護計画書を作成している。毎月の会議でも話し合い、計画に反映している。	本人の意向は日々の会話から把握し、家族の思いは訪問時や電話等で聞き、意向を尊重した計画作りに努めている。利用者に関わる職員や関係者が情報交換し、チームでの介護計画作りとモニタリングを行っている。家族等の参加を得てのサービス担当者会議は、コロナが収束するまで控えている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子はすべての職員がケース記録に記載し、注意していく事柄については伝達ノートに記載し、情報の共有をするようにしている。職員会議で再確認したり、意見等を出し合っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	買い物や受診等、柔軟な対応ができるように努めている。個々に合ったケアに努めている。訪問看護を導入している。		

岐阜県 グループホームかわばた荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のコスメティックの方の化粧クラブや、ハンドマッサージのボランティアがあったが、コロナの影響の為に行っていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診対応に家族の協力もある。職員で対応した時には、受診結果を報告している。定期受診以外でも何かあった時には、必要に応じて受診対応をしている。	利用者は、入居前のかかりつけ医を継続し、家族の協力も得て受診しているが、コロナ禍では職員対応でも支援している。看護師資格を持つ職員を配置し、同法人の特養看護師や、訪問看護師とも連携しながら看取りケアにも備え、適切な医療支援に取り組んでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	何かあった時にはすぐに報告、相談し必要に応じて受診している。毎日の処置が必要な方への対応もしている。何かあった時には訪問看護師に伝えて指示を受けたり来所してもらっている。訪問看護師に毎月の会議に参加してもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	病院や家族に様子を聞くようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期の対応方針が文章にしてある。事業所でできる事を説明し、家族の思いを受け止めるようにしている。令和2年4月から訪問看護を導入し連携を取っている。	重度化や終末期の対応は入居時に説明している。母体法人の特養への移行や協力病院への入院等、家族に不安がないよう支援している。主治医との連携を密にし、訪問看護との連携体制で看取り事例も増えている。コロナ禍であったが、家族と一緒に看取りを行う事が出来、実践の中で、より良い支援方法を学んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月の会議の時にAEDの使い方、心肺蘇生の訓練を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年3回の消防訓練を実施している。自治会の応援協力体制はあるが、コロナ禍の為に合同の訓練は行っていない。河川の増水の時に母体の職員の協力があり母体の特養へ避難し1泊し安全を確保する事ができた。母体に食品の備蓄がある。	地域の防災訓練は中止であったが、母体法人施設と合同で消防訓練を実施し、消防署には報告書を提出している。直下に一級河川があり、過去に増水して避難した経験もあり、家族への連絡体制については実践済みである。備蓄品は本部で管理されており、事業所内には保管していない。	事業所の周辺環境からは、想定外の災害も起こり得ると思われる。更なる安全対策を話し合い、母体法人の支援と併せて、事業所独自でも必要最低限の備蓄品確保を検討されたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄や入浴、更衣時等の声かけや戸を閉める等のプライバシーを自分が利用者だったらという事を考えながら気を付けている。全室個室で、トイレ洗面台もある。居室へ入る時にはノックをしている。	全居室に洗面台とトイレが設置され、利用者のプライバシー保護や尊厳を大切にする法人の姿勢が居室の仕様に表れている。職員一人ひとりが、利用者への言葉遣いやスピーチロックについて意識し、居室入室時のノックや声掛けなど、基本的マナーを守ることを心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	起床時や入浴時の衣服の選択、またおやつや飲み物の選択、自己決定ができるような働き掛けを心掛けている。誕生日には希望メニューが提供できるように、日頃の会話からくみ取れるような関わりを大切にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	見える所に新聞や本、仕事(洗濯物作業等)を置き、好きな時に見たり、できる環境を作っている。居室での自分の時間等、本人の希望に沿うようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧をされる方があるので、継続できるように購入等の支援をしている。髭剃りがきれいになってきているか確認し援助している。定期的に散髪をしている。衣類等の古くなった物やほころび等の確認をし、家族に依頼したり、購入援助と繕っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と一緒に調理や盛り付けを行っている。食材を伝え調理法を聞いたりして献立に取り入れている。郷土料理や季節の物を作ることも取り入れている。椅子への移乗や踏み台を使用して姿勢にも配慮している。利用者との買い物の外出はコロナの影響で行けてない。	コロナ禍での業務負担や人手不足もあり、肉や魚等の主菜は調理済み食品を利用したり、副菜は旬の野菜や地域からの差し入れなどを利用しながら、職員が調理している。郷土料理や行事の献立は、利用者の楽しみとなっている。職員も同じものを食しているが、感染防止の為、テーブルを別になっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取量を記録し、個々に合わせた量や形態で提供している。ミキサー食の方も。嗜好に合わせて代替え食を提供している。お茶以外の飲み物を提供して水分摂取できるようにしている。食事が摂れない時は本人の摂り出せる物を考慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行い出来ない部分を介助している。歯磨きティッシュや洗口液を使用する方もある。歯科受診や訪問歯科を受ける方もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表に記録し、排泄パターンを把握して個々に合わせた声かけやトイレ誘導を行い、トイレでの排泄に心がけている。個々に合った紙パンツやパッドを検討し、失禁を減らせるよう支援している。紙パンツから布パンツになった方もある。	各居室にトイレがあり、支援が必要な人には、声かけで居室へ誘導している。自立の人も職員がその行動を把握しながら排泄表に記録し、後始末の確認もしている。オムツ利用者には、2人介助でトイレでの排泄を支援し、夜間はベッド上で速やかに交換している。共用空間には、車椅子用の広いトイレが設置してある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄リズムを把握し、食事内容や水分摂取量、運動等に配慮している。訪問看護師や主治医に相談する事もある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個々の気分を大切に、ゆっくりと入浴できるようにしている。週3回入浴ができる体制が取れるように努力している。入浴を拒否される時には、順番をずらしたり翌日にしているが、入りたいという気分のタイミングで入浴して頂けるように配慮している。	理念の「ゆっくり」は、入浴支援でも実践されており、利用者好みの湯温で、時間を気にせず楽しめるよう配慮している。重度の利用者は、2人介助体制で安全安心な入浴支援を心掛けている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間の休息や就寝時間は個々に合った時間に対応している。照明や室温、衣服等に配慮し、寝つけない時には、飲み物を提供したり話相手となっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容は常時見えるようにしている。誤薬防止の為、準備と服薬介助と段階を得て確認するようにしている。介助の時は日付と名前を読み上げるように心がけている。変更等があった場合はその都度伝達している。訪問看護師に相談もしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理や洗濯、掃除等を継続し誰かのためになる事が出来る喜びや、やりがいを感じて頂けるような支援をしている。趣味の歌をうたう事や俳句等の活動ができるように配慮している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナの影響もあり日常的な外出支援はできていないが、桜の季節には外へ出て見学、秋には紅葉見学に出かけた。天気の良い日には、バルコニーでお茶をする時間や外の景色や空気に触れてもらう時間を設けている。	現在、外食や買い物、一時帰宅等は控え、近隣を散歩したり、庭での外気浴やバルコニーで過ごす時間を作るなど工夫している。感染予防対策をした上で、母体法人の車と運転手の協力を得て、季節の桜や紅葉を見に行くことができる。道中を懐かしむ利用者の道案内を皆で楽しむなど、出来る範囲での外出を支援している。	

岐阜県 グループホームかわばた荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は小銭を所持している方がある。個々で欲しい物や日用品の購入の支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から職員に電話がかかってきた時に、利用者と代わって会話をしてもらっている。家族から申し出もあるので対応している。家族からお便りが届く方や、手紙やはがき年賀状を書かれる方もあるので支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎日居室の掃除を行っている。季節の花やお雛様等を飾って季節を感じて頂けるようにしている。床暖の設備があり、全室エアコンが設置してある。	床、梁、扉、棚、テーブル、椅子等、共有空間は木材仕様の落ち着いた雰囲気がある。吹き抜けの天井が高く開放感があり、廊下も広い。縮小した形で夏祭りを予定し、飾り付けの準備がされている。掃除が行き届き、清潔で整理整頓された心地よい環境になっている。庭には百日草やコスモスが一面に咲いている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間にソファやベンチが設置しており誰でも座れるようにしてある。もう一つのユニットへも行き来できるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのあるソファや机等を持参して頂いている。安全に過ごせるように設置している。居室には家族等の写真や作品が飾ってある。	トイレ、洗面台が各居室にあり、洗面台の脇には衛生用品等の収納棚がある。ベッド、木製の衣類収納タンス、椅子を事業所で提供している。利用者は、馴染みのソファや趣味を楽しむための机や本を持ち込み、家族等の写真を飾るなど、居心地良い生活の場になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下等の共用部分にはできる限り必要以外のものは置かないようにしている。車椅子を使用しない時には、居室に入れて共用部が広く使えるようにしている。居室の入り口に表札を付けている。		